

1. 授業のねらい・概要

とめどないグローバル化が進行する今日、世界の社会経済を俯瞰する視点を獲得することは極めて重要な意味を持つ。それはナショナルな責任を負う立場であろうと、ローカルに暮らす立場であろうと変わりがない。いま世の中で何が起きているのか、身近な現象と遥か遠い世界のどこかで生じている現象とを、結びつけて理解する能力が求められている。そうした能力を獲得する一つの方法として、本講義では世界の歴史を経済の視点から論じていく。

今年度は「バブル経済」をテーマとして論じる。ここ数十年の間に、金融自由化がグローバルに進展して金融商品が多様化するとともに、経済の実物部門に比して金融部門が極端に肥大化してきた。加えて、近年の先進諸国における金融緩和政策は金融部門さらなる拡大に拍車をかけている。そうしたことを条件として、バブル経済の形成と崩壊のサイクルが実物部門に与える影響も深刻になっている。しかしバブル経済の特徴の一つは、その形成過程においてそれがバブルであることに気が付きにくいことにある。そのため、バブルに備えるためにはこれまでの歴史的経験を振り返らなければならない。

前期の世界経済史 A では、17 世紀オランダのチューリップバブルから 19 世紀イギリスの鉄道バブルまでの世界史上における著名な事例を学ぶことによって、今後も周期的に発生するであろうバブル経済を理解する手掛かりを得ることを目的とする。本講義を通じて、受講者には近年の経済過程を動的に理解する方法を身に付けてもらいたい。

2. 授業の進め方

テキストを受講者同士で読み進めながら、バブル経済について学んでいく。とりわけ重要な用語・概念は重点的に解説する。テキストを補完する必要がある点については、別途資料を配布して論じる。

3. 授業計画

1. イントロダクション	9. 南海泡沫の破裂
2. 近世初期の金融投機	10. 「合理的なバブル」
3. チューリップ狂	11. 1820 年代の新興市場
4. 初期の株式市場	12. 南アメリカの鉱業バブル
5. 初期の資本市場	13. 景気循環と投機循環
6. イングランド銀行の誕生	14. 交通・通信とバブル
7. 南海会社	15. 鉄道バブル
8. 南海泡沫と投資家	

4. 到達目標

バブル経済の歴史を理解し、他者に対して文章・口頭で説明することができるようになること。

5. 準備学修に必要な時間、またはそれに準じる程度の具体的な学修内容

テキストを熟読するとともに知らない用語について意味を調べ、毎回配布する課題プリントに取り組むこと。

6. 成績評価の方法・基準

毎回提出する課題、レスポンスペーパーおよび試験によって評価する。

予習・復習を含め、講義への主体的な参加の程度が評価の対象となる。

7. テキスト・参考文献

【テキスト】エドワード・チャンセラー（山岡洋一訳）『バブルの歴史 チューリップ恐慌からインターネット投機へ』（日経 BP 社、2000 年）。

8. 受講上の留意事項

毎回の講義に向けて、日常的にテキストの予習を行うこと。

講義にはテキストを必ず持参すること。

後期の世界経済史 B および日本経済論 A・B を併せて受講することが望ましい。